

教養教育に関する評価

— 外国語科目の授業評価を中心として —

教養教育調査研究部会

教養教育では、1998年度前期に授業評価を実施し、その結果は、『教養教育研究』第4号（1999年3月）に掲載した。本報告は、引き続いて行われた1998年度後期の授業評価の結果を報告するものである。1998年度前期は教養教育だけが行ったが、1998年度後期は全学的に（専門教育も含む形で）行われた。教養教育の前期と後期で比較すると、前期の場合は、主題と共通科目に限定されたが、後期の場合は、主題と共通の他に外国語が加わった。『教養教育研究』第4号には、主題と共通の分析を掲載したので、この報告書では、主として外国語を分析の対象とすることとしたい。

使用するデータは、前期の場合と同様に、ダイヤモンド・サイド（学生側）とサプライ・サイド（教官側）の2種類である。

まず、学生による授業評価のデータであるが、今回は、業者に発注するのではなく、大学事務の方で入力した。非常に大変な作業であったと推測される。更に、そのオリジナルデータが表計算で処理されたデータに変換されており、ここでは、そのファイル、即ち、「教養集計.xls」ファイルを使って分析をすることができた。

他方、1998年度前期と同様に、学生課から教官の成績判定等のデータもいただいた。成績の提出期限はかなり前に終わっていたが、4月13日時点でいただいたデータをみると、実は、まだ成績判定が提出されていない科目があった。と同時に、それをみた結果、学生による授業評価が行われた科目数より、教官の成績判定がなされた科目数の方が多かったということもわかった。いうまでもなく、成績判定は教官の誰もが提出しなければならないものである。ということは、1998年後期は、学生による授業評価は全員参加ということで行われたはずであるが、教養教育の数科目については、実は、学生による授業評価を行っていなかったということになる。大学も一つの組織であり、大学全体で決定したことがきちんと実施されないということは由々しき問題である。

要するに、一方では、学生による授業評価は行ったが、まだ成績が出ていない科目があり、他方では、成績は出ているが、学生による授業評価が行われなかった科目があるということになる。分析に際しては、学生による授業評価のデータと教官の成績判定等のデータを一つ一つ対応させる必要があるため、こうしたことがあると、データの一部を削除する必要がでてくる。いうまでもなく、データの一部を削除するという作業は慎重な作業とならざるをえない。したがって、分析するにあたって、何の意味もない無駄な労力が必要となった。1998年度前期の分析でも、同じように提出期限をはるかに過ぎてもまだ成績を提出していない教官がいた。こうしたことが繰り返されると、一部の教官の怠慢な行動が、大学改革の障害になる可能性すらある。どの大学でもあることかもしれないが、「親方日の丸では今後の大学は生き残ることができない」と厳しく警句を発しておきたい。

1. 学生による授業評価のデータ

(1) データの形式

「教養集計. xls」ファイルには、後期に実施した外国語と主題・共通のデータが入っている。

A	B	C	D	GHI	JKO	P	Q	R	S				
R-ID	質問 番号	科目 コード	科目名	1	2	3	4	5	ID	質問内容	名前	所 属	口 座

A列のR-IDには、G1（外国語）、G2（主題・共通）が入っている。B列の質問番号は、外国語は01～20まで、主題・共通は01～18までの番号がある。E列には回答の総計があり、F列は空白欄になっているが、いずれの列も非表示になっている。K列の後のL、M、Nも空白欄で、非表示になっている。O列には、質問番号が1-1といった形式で入っている。データは、まずA、続いてB、Cの順で並べられている。したがって、外国語から質問番号順に並んでいて、同じ質問のなかでは科目コード順に並んでいる。

教養教育で、1998年度後期に学生による授業評価が行われた科目数は、英語が78科目、初修が31科目、主題・共通が43科目で、計152科目であった。

(2) 平均値の計算

1～5までの列には、その回答を選んだ学生の数が記入されている。出席率を質問した最初の

表 1

英 語	平均点	初 修	平均点	主題・共通	平均点
I-1	1.26	I-1	1.31	I-1	1.78
I-2	3.09	I-2	2.79	I-2	1.72
I-3	2.36	I-3	2.51	I-3	1.82
I-4	3.72	I-4	3.42	I-4	3.23
II-1	3.87	II-1	3.53	II-1	3.79
II-2	3.86	II-2	3.66	II-2	3.86
II-3	3.74	II-3	3.32	II-3	3.54
II-4	3.54	II-4	3.26	II-4	3.10
II-5	3.12	II-5	3.18	II-5	3.13
III-1	3.71	III-1	3.60	III-1	3.61
III-2	3.67	III-2	3.50	III-2	3.47
III-3	3.53	III-3	3.41	III-3	3.57
III-4	3.57	III-4	3.43	III-4	2.85
III-5	3.58	III-5	3.48	IV-1	3.41
IV-1	3.78	IV-1	3.73	IV-2	3.26
IV-2	3.19	IV-2	3.28	IV-3	3.37
IV-3	3.72	IV-3	3.44	IV-4	3.02
V-1	3.76	V-1	3.60	IV-5	2.74
V-2	3.21	V-2	3.38		
V-3	2.92	V-3	3.12		

質問を除くと、1が最も低い評価であり、5が最も高い評価である。そこで、5の欄の数値には5をかけ、4には4、3には3、2には2、1はそのままにして合計し、回答総数で割ると、5段階評価でみた平均点が計算される。英語と初修と主題・共通の全体の平均値を計算した。表1参照（質問項目については、質問票を参照されたい）。

(3) 各教官のデータ作成

「最優先されるキー」として「R-ID (A列)」、「2番目に優先されるキー」として「科目コード (C列)」を選び、「3番目に優先されるキー」を「質問番号 (B列)」にして、並べ替えをする。そうすると、三つの科目群が授業科目番号順に並び、どの授業科目も、質問数だけの行があることとなる（外国語は20行、主題・共通は18行）。

個々の科目の平均点も同様に計算した。その上で、教官一人一人の分を印刷し、質問票の原本（自由回答欄がある）とともに配布することとした。全体の平均値と比較して自分の平均値がどのような値になっているか、授業方法等の改善の必要がないかどうか、各自で確かめていただきたいと考えている。

(4) 学生による授業評価の概要

A. 外国語と主題・共通の比較

図1 同じ質問項目での比較（教養教育科目）

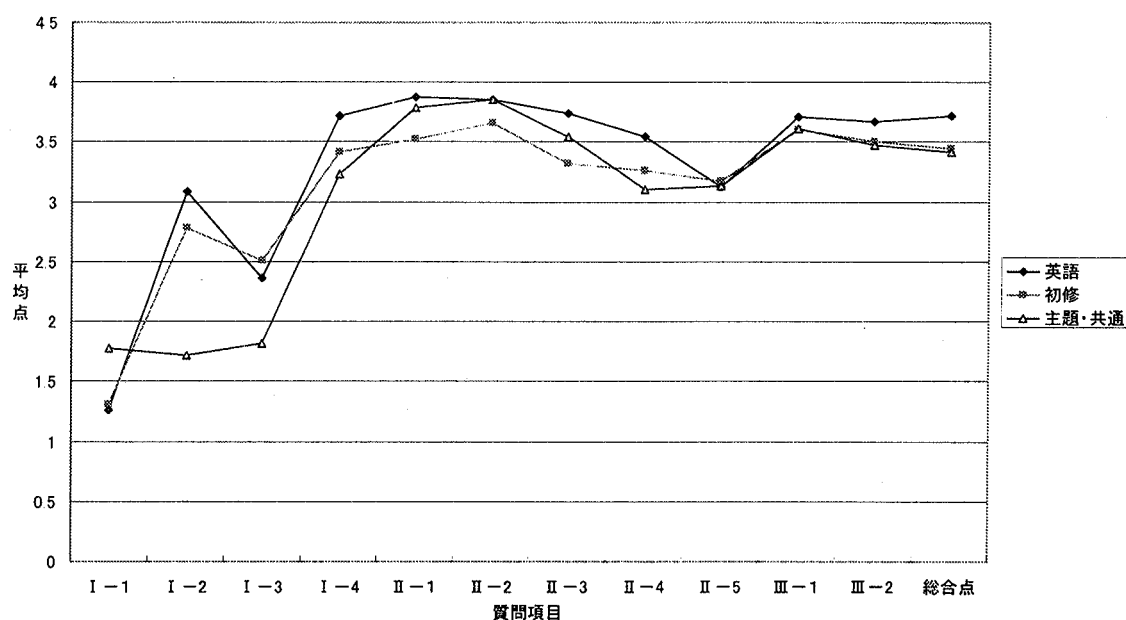


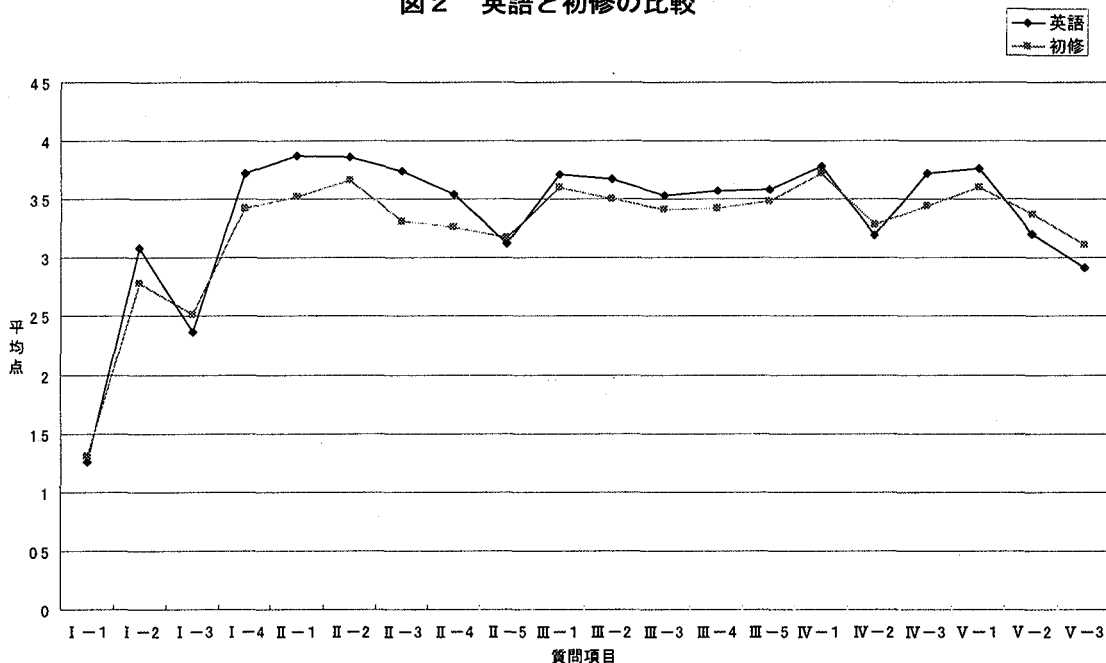
図1をみていただきたい。ここでは、外国語が英語（既修）と初修に分けられている。I-1は出席率への質問であるが、この質問だけは数が少ないほどよい評価になる。当然のことであるが、外国語への出席率は高い。主題・共通でも1.78であるから高いと言えなくはないが、これはアンケートを実施した日に授業に参加した学生の出席率であるから、受講者や受験者の授業への出席率ではない。I-2の予習をするかどうかでは、値が高いほど予習しているということにな

るが、外国語と主題・共通とでは1ポイント以上の差がある。主題・共通ではほとんど予習をしないのに、外国語では3に近いから、予習をする学生としない学生が半々というところだろう。I-3の復習をするかどうかでも、外国語と主題・共通ではかなり差がある。同じ外国語でも、ここは、初修の方が少し高い。やはり、初修ははじめての外国語であり、復習が欠かせないのだろう。

それ以外の項目では、英語が一番高く、初修と主題・共通が質問項目毎に上下しているが、主題・共通の方が高い項目が多い。初修が主題・共通より高いのが、質問項目I-4（授業に集中している）、II-4（学生の理解度を把握して授業を進めている）位であり、同じ位なのがII-5（視聴覚機器等の使い方）、III-1（シラバスに沿っている）、III-2（受講生の水準に適している）と総合的満足度（質問番号が外国語と主題・共通で異なっているので、総合的満足度とした）である。英語と初修の違いは次に詳しくみることにして、初修と主題・共通の違いはなるほどと思わせる内容となっている。

また、主題・共通については前期との比較が可能である。但し、後期は全学的に実施するということもあり、質問項目はかなりの部分で全学的に統一されることとなった。したがって、前期と後期では質問項目や質問番号が異なっている。前期では、問20で総合的な満足度を聞いていた。そこでも値は3.41であり、驚くべきことに、前期も後期も同じ値3.41であったということになる。

図2 英語と初修の比較

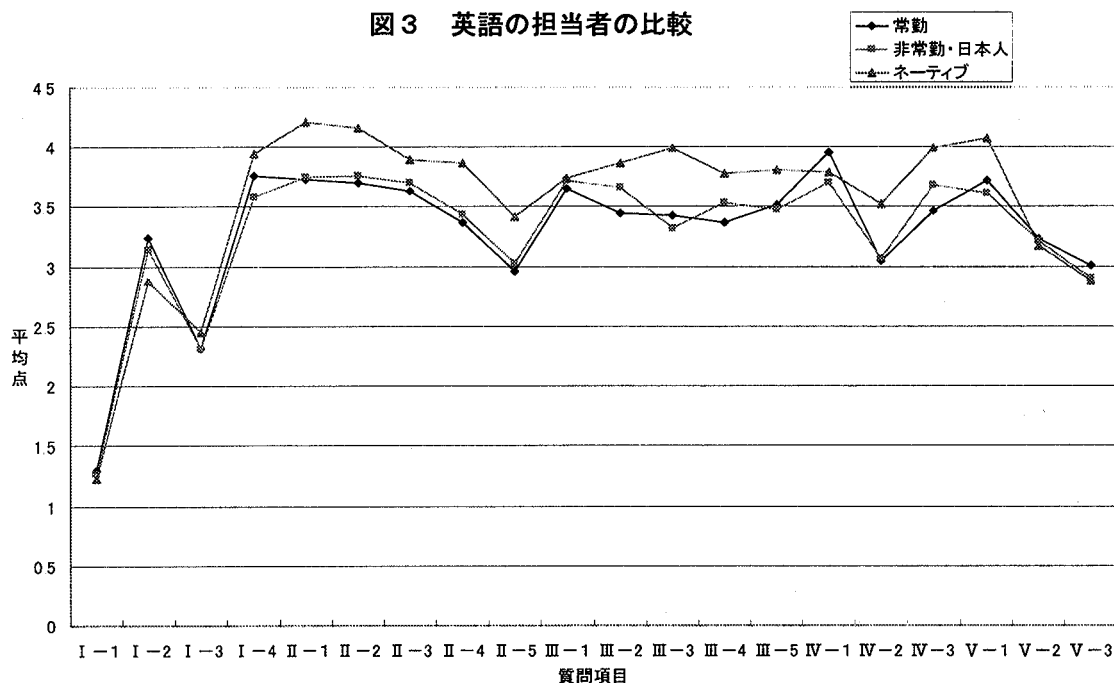


B. 英語と初修の比較

英語と初修は質問項目が同じであるから、全項目について比較が出来る。図2参照。すでにみたように、一部を除き、英語の方が高い値を示している。

そこで、英語の評価を担当者別に分析してみよう。本学の日本人スタッフ（常勤）と非常勤の日本人とネイティブ（本学の常勤スタッフも含む）の3種類に分けて、同じように平均値を計算し、グラフ化したのが、図3である。ここでは、非常に明確な結果が出ている。つまり、ネイティブに対する評価が高いのである。常勤と非常勤の日本人の場合は質問項目毎に上下しているが、非常勤の日本人の方が若干高い傾向がある。

図3 英語の担当者の比較



総合的な満足度をみたIV-3では、ネイティブの場合は4に近いが、常勤の場合は、3.42で、初修より若干低い値となる。初修でも、同じように担当者で分けるとよいが、同じ時間を常勤とネイティブの組み合わせで行っている場合が多く、事実上分けることは不可能である。したがって、初修でも同じようにネイティブの方が高いとすると（但し、ネイティブの数が英語より少ないし、初修は初めて学ぶものであるから、ネイティブの評価が英語ほど高くはならないだろうということ等を考慮すると）、結局、常勤スタッフで比較すると、英語と初修は大体同じくらいの評価であったということになる。

総合的満足度以外にも、この英語の表は、興味ある結果を示している。I-1（出席率）はどの担当者グループもほぼ同じである。それ以外で、ネイティブの方が低いのは、I-2（予習の程度）とIV-1（1クラスの受講生の数）位である。予習が少なくて済むこと、会話中心となるから1クラスの受講者の数としては、不満というか、満足度が小さいこととなっている。しかし、それ以外は圧倒的にネイティブが高い評価を得ている。特に強調すべき点は、II-1からII-5までの「教官の授業に対する取り組み」を聞いた質問項目である。授業内容ではなく、教官の取り組みを聞いている質問項目であるが、ネイティブが、他の二つの担当グループと比較して、かなりの差をつけて高い評価を得ている。また、III-3（語学訓練を通して見識が広められた）も4近くの評価を得ており、これに対して、他の二つのグループは3.5を切っている。このようにみても、ネイティブが開講する授業への評価が高かったということは厳然たる事実であり（もっとも、以上の結果はあくまでも現在の担当者への評価であって、ネイティブなら誰でもよいというわけではないし、また、だからといって、すぐさまネイティブを増やすべきだという話になるとは限らないし、増やせる条件が香川大学にあるかどうかもわからないが）、平成12年度以降の外国語科目の再編成で是非検討材料にしていきたい点である。

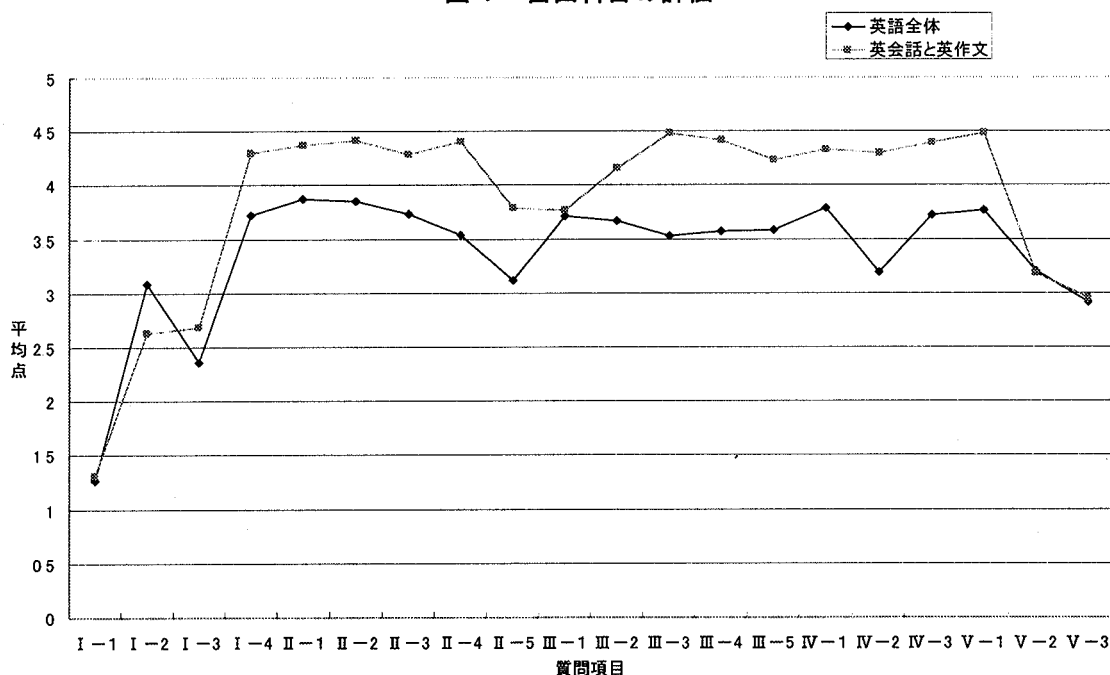
なお、外国語のVの質問項目では、学生に授業内容の希望を聞いているが、英語でみると、V

ー1が3.76と高いが、V-3は2.92と低い。「読む」や「書く」と比較して、「会話」を中心とした授業内容への希望が高いことがわかる。英語の担当者のなかで、ネイティブに対する評価が非常に高いことと関連しているかもしれない。但し、V-2も3.21という値になっており、読む訓練を軽視してよいということではないようである。平成12年度以降の外国語科目の再編成の際には、この点も十分考慮していただきたい。

C. 必修科目と自由科目の比較

英語の英会話と英作文（但し、後期には英作文はないから、ここでは英会話だけのデータになっている）は、自由科目である。回答者は70名で少ないが、英語全体とこうした自由科目を比較してみよう。図4参照。

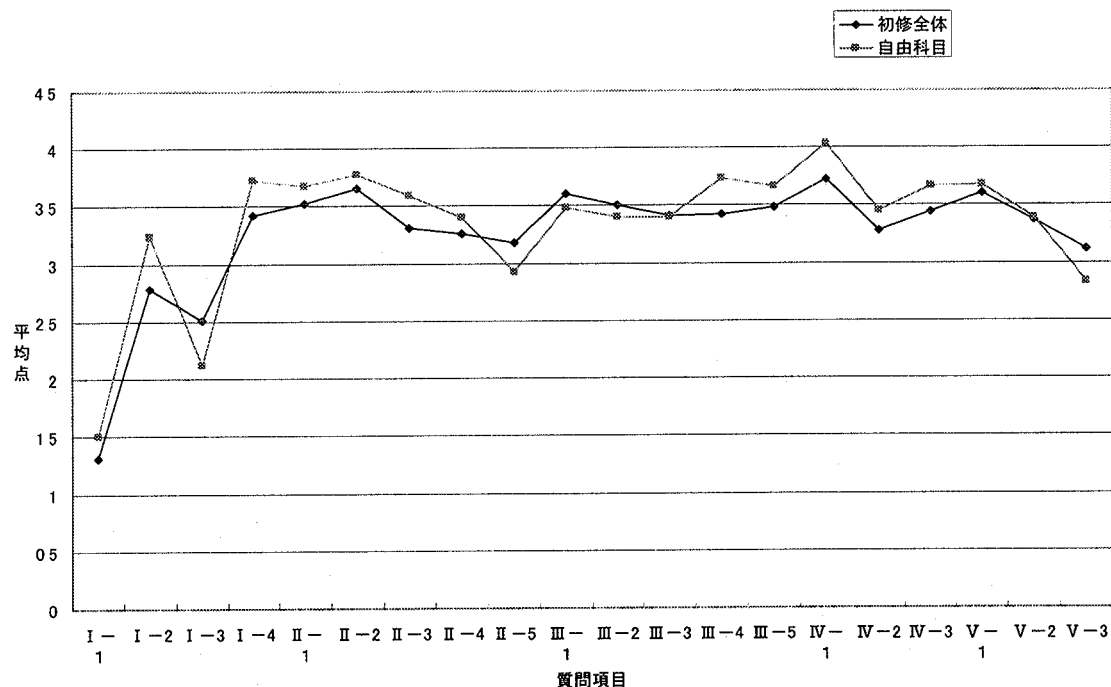
図4 自由科目の評価



これらの自由科目は、図3にはなかった4.5に近い評価がたくさんあり、圧倒的に高い評価を得ていることがわかる（図を比較する場合に、図3の目盛りの上限が4.5であるのに対し、図4の目盛りの上限が5であることに注意されたい）。図4に掲載してある英語全体のなかには、当然自由科目も含まれているので、自由科目と必修科目とを比較するなら、差はもっと大きくなるだろう。英会話はすべてネイティブが担当しているが、図3のネイティブだけの評価より更に高い評価を得ていることになる。したがって、この評価の高さには、ネイティブであること、英会話であること、更に、本当に履修したい学生だけが履修する自由科目であることという三つの要因が作用しているものと思われる。英語には、中学校以来の長い学習経験がある。そこで苦手意識をもった学生に無理矢理授業を取らせても、急に効果が出てくるものではないかもしれない。その意味で、この自由科目の評価の高さは、平成12年度以降の外国語科目の再編成でも考慮すべき論点となることだろう。もっとも、こうした自由科目の履修者が70名しかいないというところに問題があると言えなくもないが、受講生の少ないことが、英会話という授業にとって必要不可欠な条件であることを考えるとやむを得ないところもあるといわざるをえない。

他方、初修の自由科目を取り出すと、図5のようになる。ここでは、自由科目が特別に高い値を示しているわけではない。この場合、自由科目というのは、教育学部や経済学部の一部に、英語4単位で初修8単位という履修が可能などところがあり、その意味では、必修と非必修の間にあるような科目であり、このあたりの選択の仕方がこの図には示されているように思われる。

図5 自由科目の評価



2. 教官による成績判定等のデータ

(1) 1998年度全体のデータ

1998年前期でも同じ処理をした。前期は、主題・共通だけであり、外国語は分析しなかったもので、今回は外国語に限定することとする。学生課からいただいたデータは、後期のものだけでなく、1年間のものであった。そこで、まず1年間全体でみてみた。なお、出席率を計算する時には、出席者数として、学生の授業評価の回答数を使うこととするから、1年間を通したものでは、出席率は計算できない。

もう一つ注意すべきことは、個別的なデータの公開はしないのが原則である。したがって、学年・学部毎の特徴をみていく時、1クラスしかない授業がある。その場合は事実上担当者が確定できることとなるから、そうしたものは掲載しないこととした。

A. 英語の場合

表2を参照されたい。英語の場合、Zクラスは受験率が悪いが、それ以外は、履修したら95%以上は受験することとなっている。必修科目たる所以である。合格率も、Zクラスも含めて90%以上である。

表 2

	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	不合格率	不受験率
英語全体	0.94	0.92	0.36	0.31	0.33	0.08	0.06
I L	0.99	0.94	0.41	0.35	0.24	0.06	0.01
I J E	0.97	0.91	0.41	0.34	0.25	0.09	0.03
I T	0.98	0.92	0.32	0.37	0.32	0.08	0.02
I A	0.96	0.93	0.28	0.24	0.48	0.07	0.04
II L	0.94	0.95	0.46	0.28	0.27	0.05	0.06
II J E	0.96	0.92	0.41	0.33	0.26	0.08	0.04
II T	0.95	0.91	0.37	0.36	0.27	0.09	0.05
II A	0.94	0.94	0.26	0.35	0.39	0.06	0.06
III A	0.95	0.93	0.28	0.36	0.36	0.07	0.05
III L J E	0.94	0.93	0.38	0.31	0.30	0.07	0.06
I Z	0.87	0.93	0.00	0.00	1.00	0.07	0.13
II Z	0.71	0.90	0.00	0.06	0.94	0.10	0.29
III Z	0.66	0.96	0.00	0.10	0.90	0.04	0.34
IV Z	0.90	0.94	0.31	0.33	0.36	0.06	0.10
Z A	0.71	0.71	0.48	0.28	0.24	0.29	0.29
英会話と英作文	0.92	0.89	0.36	0.31	0.32	0.11	0.08

Aの率を学部別にみると、かなり明瞭な傾向がみえる。工学部や農学部が明らかにAの比率が低い。逆にいえば、法・経済・教育が高いことになり、理系の学部と文系の学部の差が、英語の成績に端的に示されている。

では同じ文系のなかではどうであろうか。JEやLJEのように、複数学部の学生が混じった授業を学部別にみたのが、次の表3である。これをみると、法学部学生が圧倒的にAの率が高い。経済学部は明らかに低い。教育学部は理系の学生も一部含まれていることもあり、法学部と比較して低い。

表 3

英語合同クラス	教 育 学 部						
	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	不合格率	不受験率
I J E							
II J E							
III J E	0.95	0.93	0.36	0.34	0.30	0.07	0.05

英語合同クラス	法 学 部						
	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	不合格率	不受験率
I J E	0.97	0.90	0.44	0.34	0.22	0.10	0.03
II J E	0.96	0.94	0.51	0.31	0.17	0.06	0.04
III J E	0.94	0.94	0.43	0.28	0.29	0.06	0.06

英語合同クラス	経 済 学 部						
	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	不合格率	不受験率
I J E	0.97	0.91	0.40	0.34	0.26	0.09	0.03
II J E	0.97	0.91	0.35	0.34	0.30	0.09	0.03
III J E	0.94	0.92	0.37	0.32	0.31	0.08	0.06

B. 初修の場合

初修が英語と比較すると、受験率が低いことがわかる。履修届を出したが、最終的に受験しなかった学生が一定部分いるということである。受験率では、ドイツ語とフランス語が高くて、中国語とロシア語が低い。合格率では、フランス語は低くなっている（表をみる際に、たとえばフランス語はフランス語Ⅰ、フランス語Ⅱ以外の科目もあることに注意されたい）。Aの率では、フランス語と中国語が低い。1998年度をみる限り、フランス語が厳しかったということになる。表5参照。

表5

	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	不合格率	不受験率
初修全体	0.88	0.92	0.37	0.32	0.31	0.08	0.12
ドイツ語	0.90	0.92	0.43	0.31	0.26	0.08	0.10
ドイツ語Ⅰ	0.94	0.93	0.49	0.29	0.22	0.07	0.06
ドイツ語Ⅱ	0.90	0.89	0.40	0.35	0.24	0.11	0.10
フランス語	0.92	0.85	0.30	0.20	0.49	0.15	0.08
フランス語Ⅰ	0.94	0.84	0.25	0.20	0.55	0.16	0.06
フランス語Ⅱ	0.94	0.79	0.26	0.20	0.55	0.21	0.06
中国語	0.86	0.95	0.31	0.40	0.29	0.05	0.14
中国語Ⅰ	0.88	0.95	0.30	0.44	0.26	0.05	0.12
中国語Ⅱ	0.87	0.95	0.33	0.43	0.24	0.05	0.13
ロシア語	0.79	0.99	0.54	0.27	0.19	0.01	0.21

(2) 1998年後期のデータ

ここでは、1998年後期のすべての科目ではなく、学生による授業評価が行われた科目に限定して分析してみることにする。表6参照。受験率から不合格率までの動向は、1998年全体の傾向とほとんど変わらない。当然のことであろう。

表6 (学生による授業評価が行われた科目の成績等)

	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	不合格率	不受験率
英語全体	0.83	0.88	0.94	0.93	0.39	0.34	0.27	0.07	0.06
英語ⅡL	0.88	0.95	0.93	0.95	0.46	0.28	0.26	0.05	0.07
英語ⅡJE	0.85	0.88	0.97	0.92	0.41	0.33	0.25	0.08	0.03
英語ⅡT	0.83	0.85	0.97	0.90	0.40	0.39	0.21	0.10	0.03
英語ⅡA	0.80	0.84	0.94	0.94	0.28	0.38	0.35	0.06	0.06
英語ⅣLJE	0.82	0.87	0.94	0.93	0.38	0.34	0.28	0.07	0.06
英語Z全体	0.57	0.71	0.81	0.89	0.15	0.18	0.67	0.11	0.19
英会話全体	0.70	0.70	1.00	0.81	0.46	0.27	0.27	0.19	0.00
初修全体	0.76	0.87	0.87	0.90	0.35	0.32	0.34	0.10	0.13
ドイツ語	0.76	0.80	0.94	0.88	0.39	0.34	0.27	0.12	0.06
フランス語	0.69	0.77	0.90	0.82	0.28	0.19	0.52	0.18	0.10
中国語	0.79	0.95	0.84	0.95	0.32	0.37	0.31	0.05	0.16

出席率(1)は、分子が学生による授業評価の回答者数を使った出席者数であり、分母は受講者で

あるが、試験を放棄した学生は当然授業評価にも参加していないから、受験率の低かった初修は、出席率(1)は低い値になっている。これに対して、出席率(2)は、分母が受験者であるから、受講届けを出したが授業評価も受験もしないといった学生は入ってこない。したがって、英語と初修で同じような値になっている。英語全体で88%、初修全体で87%であるが、試験の直前に行った授業評価でも10%以上が出席していないということは驚くべきことではある。

英語の場合は、一部の学部・学科を別とすれば、8単位が必修である。そして、英会話と英作文が自由科目となっている。こうした自由科目では、どのような成績が出ているのであろうか。出席率は高くないし、合格率も高くないが、Aの率は高い。単位が楽にもらえるということはないが(学生による授業評価の高さは合格率の高さとは関係しないようだ)、やる気のある学生がいい成績を取っているというところだろう。

表7

	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	不合格率	不受験率
常勤	0.72	0.84	0.86	0.94	0.33	0.33	0.34	0.06	0.14
非常勤・日本人	0.83	0.87	0.96	0.91	0.46	0.26	0.28	0.09	0.04
ネイティブ	0.83	0.86	0.97	0.93	0.26	0.45	0.29	0.07	0.03

先にみたように、英語の場合、担当者毎に学生による授業評価の内容が異なっていた。要するに、ネイティブの授業評価が高い値を示していたのである。今度は、それを教官の成績判定の方からみてみよう。表7参照。ネイティブの授業への出席率は高いし、受験率も高いが、Aの率は低い。ここから、少なくとも成績判定が甘いから、学生の評価が高かったということはないということにはなるだろう。

(文責：安井修二)

なお、本報告を前年度委員の安井が担当したのは、1998年度後期の分析を1998年度前期の分析の継続として行うことによって、1998年度を通した分析という一貫性をもたせるためである。

G1

教養教育 (外国語科目)

学生による授業評価

この調査は、香川大学における外国語教育を改善するための資料を得る目的で行うものであり、あなたが受講している授業について、次の設問に回答して下さい。
なお、この調査は無記名で、成績評価などとは無関係です。

授業科目名	科目コード					
学部・学科コード (あなたの学部・学科等を裏面のコード表から選んで記入してください)						
年次 (あなたは何年次に在学していますか)				第	年次	

以下の各項目について、次の5段階評価から1つ選び、その番号を右端の空欄に記入して下さい。

非常にそうである……5 かなりそうである……4 どちらともいえない……3
あまりそうでない……2 全くそうでない……1

I あなたの授業に対する取り組みについて

- 1 授業の出席率について 1
 1. 100%～80% 2. 79%～60% 3. 59%～40% 4. 39%～20% 5. 20%未満
- 2 よく予習をして授業に出席した。 2
- 3 授業の復習をこまめにした。 3
- 4 授業中は、教官の話す内容によく集中している。 4

II 教官の授業に対する取り組みについて

- 1 教官の教育に対する情熱・熱意が感じられる。 1
- 2 教官の授業に対する準備が十分されている。 2
- 3 教官の話し方は明瞭で聞き取りやすい。 3
- 4 学生の理解度を把握して授業を進めている。 4
- 5 視聴覚機器の使い方や黒板の板書が効果的である。 5

III 授業内容について

- 1 シラバス (講義要項) の内容・目的に合致した授業である。 1
- 2 受講生の水準に適した授業内容である。 2
- 3 外国語の力を身につけるのに効果的な授業である。 3
- 4 外国語の訓練を通して異文化についての見識が深められる授業である。 4
- 5 大学における外国語教育にふさわしい内容である。 5

IV 授業を受けての感想

- 1 1クラスの受講生の数は適正である。 1
- 2 この授業を受けて、外国語に対する興味が増した。 2
- 3 総合的に判断して、この授業に満足している。 3

V あなたの希望する外国語科目授業内容

- 1 会話の訓練を中心とした授業内容を希望する。 1
- 2 読む訓練を中心とした授業内容を希望する。 2
- 3 書く訓練を中心とした授業内容を希望する。 3

VI この授業について感じたことや意見があれば裏面に自由に書いてください。

